漱石が小説『こころ』を通して私たちに託したメッセージ

『現代日本の開花』より漱石は、「西洋の開化（すなわち一般の開化）は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である」と述べている。これはどういう訳かというと、「西洋の開化は行雲流水のごとく自然に働いているが、御維新後外国と交渉を付けた以後の日本の開化は大分勝手が違います。」また「勿論どこの国だって隣づき合いがある以上はその影響を受けるのが勿論の事だから吾日本といえども昔からそう超然としてただ自分だけの活力で発展したわけではない。」とも述べている。すなわちこれは、諸外国は、自力で試行錯誤して発展してきたのに対し、日本は、その成功例を模倣して発展してきたということだろう。

とのことにより日本にどのような弊害が現れるかというと、諸外国は、しっかり手順を踏んできたため、穴も少ないが、日本は所詮付け焼刃なため、政策上の穴も多いわけである。そこが諸外国と日本の大きな差の最たる例であろう。

これを漱石は「現代日本の開化は皮相上滑りの開化」と呼んでいる。

また、漱石は、『私の個人主義』で「個人主義とはたんなる利己主義とは違う『道義上の個人主義』であるといえる。』と述べている。漱石は、この個人主義を大きく三つに分けて説明している。一つ目は、「自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならないという事。」つまり自分の目的を達成するには、他人のことなど考えなければならない、ということである。二つ目は「自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに附随している義務というものを心得なければならないという事。」これは、自分が行うことには必ず責任が発生するということである。三つ目は「自己の金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重じなければならないという事。」これも第二と同じようなものと考えていいだろう。つまり漱石は、他を重んじることなくして自分を出すことをよく思っていないのがわかる。つまりこれが「道義上の個人主義」である。

これらのことを踏まえ、『こころ』を読み進めると、わかってくることがある。一つ目が教科書 159 P にある「ぬかるんだ道」である。これは急性な日本の文明開化により、道の整備が進んでいないためであると考えられる。二つ目が、鎖国時代と、維新後の日本人の考え方に差異ができているという点であろう。そして三つ目が私がKを尊重せずに抜け駆けしてしまったことである。そのため、漱石観の個人主義に反するため、苦しんでいることがわかる。

つまり漱石が伝えたかったのは、急な文明開化に戸惑う若者たちと、漱石観の個人主義による、友情との葛藤を描いていくうえで、漱石の考える今(維新後)の日本の問題点と漱石の個人主義がどういうものかを伝えようとしていたのではなかろうか。

漱石が小説『こころ』を通して私たちに託したメッセージ

夏目漱石がこころを執筆した明治時代は、西洋列国による日本の植民地化という脅威を回避するべく、見様見真似で西洋の近代文明を移植したり、模倣したりすることで、なんとか不平等条約改正を成し遂げ、日清日露戦争にも勝利し、近代国家の体制を整えるに至った時代である。そんな新しい日本になりつつある時代に発表されたのがこころだ。この作品は、利己心と人間の心の機微、犯した罪との葛藤が描かれた作品である。そこで、私は『先生』の利己心と自殺理由について考察した。

まず利己心とは自分の利益だけを考え、他人の迷惑を顧みない心の事である。下宿先の家の娘さんを愛し始めていた先生は、生活に困っていた親友Kを下宿先に連れてくる。しかし、娘さんがKに親しみを示すことに嫉妬心を覚えていく。Kも徐々に娘さんにこころを寄せていき、Kは私を呼び出し娘さんへの気持ちを打ち明ける。だが、自分も娘さんが好きだと自らの口でKに打ち明けることはなかった。この点において、先生も誰にも気持ちを打ち明けられず孤独であった。そして、焦った私は仮病を使い、Kのいないうちに奥さんに娘さんとの結婚話を持ち掛ける。なぜ私は親友を裏切ることができたのか。その理由を私は自身の利己心に勝てなかったからだと考える。４２日目の文章の中には、Kに一刻も早く恋をあきらめさせたいという先生の利己心が垣間見える発言が繰り返される。Kの恋心を知ったとたん今まで以上に娘さんとの結婚に執着していく先生だが、これはこころが発表された明治時代に西洋から輸入された近代資本主義に似ている。他人が欲しがるから自分ももっと欲しくなるというのもれっきとした利己心であるだろう。利己心を優先した後、親友の死に直面してしまう先生は自分の利己心だけで行動したことを悔やむ。利己心は気づかぬうちにどんどん大きくなっていくものだ。そして自分ではどうしようもないところまできて、初めて自身を大きく占める利己心に気づく。私は、先生も誰かに悩んでいることを打ち明けていれば、とめてくれる人、正気に戻させてくれる人がいたのではないだろうかと思った。孤独でいる怖さもだし、利己心は自分では制御することが難しいものであり、人を変え取り返しのつかないことになることを漱石は伝えたかったと思う。時代が目まぐるしく変わっていった明治時代、そして技術進化によりネットなどの普及によりいっそう『こころ』の孤独を感じる現代こそ、漱石のこころを読むべきではないだろうか。

ここからは自殺理由に関わる『明治の精神』について考えていくのだが、この考え方は全段落で述べた近代資本主義にも絡んでいる。先生の遺書の中で、自殺理由は『明治の精神への殉死』とつづられている。当時の明治の精神とは、中国や漢文についての学問といった漢学的教養を踏襲したもので、目上の人に対する忠義を重んじる封建道徳や、儒教道徳を基調とした考え方であった。しかし、時代の流れとともに、次第に西洋の考

え方が輸入され、この考え方は変化していき、個人の自由や権利を尊重する個人主義や個人が経済的な利潤を追求しようとする近代資本主義といった、ある意味では封建的道徳と相反する考え方が徐々に浸透していった。人々の考え方が少しずつ混ざり合いながら逆の方向に転換していくような時代こそ明治時代であったのだ。先生の昔の経験を踏まえると近代資本主義は先生にとって許しがたいものであったと想像できる。しかし、他人の欲しがるものにこそ価値があるとする、非常に近代資本主義的な欲望に負け、自分を信頼していた親友Kを裏切ってしまう。先生は、自分の中にあった明治の精神が徐々に新しい考え方に感化していっていることを感じただろう。先生の意識が、Kへの罪悪感ではなく、自分が一生背負う「人としての罪」という抽象的なものに向かっていることがKの自殺を知った時の先生の心情文や遺書からわかる。具体的な事物や人間よりも、抽象的な倫理観といったものに重きを置いていた先生にとって、自分の価値観の変化というものが大きな意味を持っていたと考えられる。そして、天皇に対する忠義を尽くすために自らの命を絶った乃木大将の死をしった先生は自殺を決意する。乃木大将の死は、明治の精神の最後の象徴というイメージをあたえるには十分だ。しかし、新しい時代を迎えるこれからの日本には、もはやその精神はなくなってしまう、そう先生は考えた。時代の流れに従って、資本主義的な考え方に支配されることを拒んだ先生は、明治の精神のあとをおって自殺した。人々の「こころ」の変化に流された先生だが、こころは時代によって変わっていく。自らの心の変化を受け入れられなかったという点でKと先生は同じではないだろうか。こころの変化にどう向き合うかを漱石は私たちに問うていると私は考える。これも漱石の伝えたかったメッセージの一つだ。

題名の『こころ』という言葉に伝えたいことが集約されているような気がする。心が利己心や時代に流された時、自分ならどうするか。これこそ漱石がこの作品を通して伝えたかったことだと私は感じた。時代の流れに流されるか、それとも自分を貫くか。人生の問いとして自分自身に置き換えて考えていきたい。

漱石が小説「こころ」を通して私たちに託したメッセージ

利己心…自分の利益だけを考え、他人の迷惑をかえりみない心のこと

現代では、利己心・利己主義というものはとりわけ問題のあるものととらえられている。心の中で思っているのはよいが、行動に移すのは公共の福祉に反するからだ。また、利己心・利己主義の対義語として利他心・利他主義というものがある。利他心とは、他人の利益を重んじ、他人が利益を得られるようにふるまおうとする心である。利己心は社会にとって良くないもの、利他心は社会にとって良いものとされ、利己心を手放すことが推奨されている。

この小説では、「私」の利己心がすさまじく表れており、自分の利益を最優先するという態度が明確である。そして、Kが自殺し、「私」も良心の呵責に耐えきれず、自殺している。これは、漱石が人間の利己心というものが発現することを嫌ったのではないかと考えられる。人間の利己心の発現を抑制して、さらに秩序だった社会を目指していたと考えられる。

個人主義…国家や社会の権威に対して個人の権利と自由を尊重することを主張すること

この個人主義という言葉は、利己主義と似たような意味でつかわれることがある。しかし、漱石の考える個人主義というものはまた違った意味であるということが「私の個人主義」からわかる。なぜなら、道義上の個人主義というものを理解していない人間は個人主義を、「自分だけを、権力なり金力なりで、一般に推し進めようとするわがまま」として捉えていると考えているからだ。これは、利己心の意味にそっくりである。

では漱石はどのように個人主義をとらえているのだろうか。「自由の背後にはきっと義務という概念が伴っています」「要するに義務心を持っていない自由は本当の自由ではないと考えます」という部分からわかるように、個人の権利と自由を尊重するならば、自由を追い求めるだけでなく、義務心が必要であると考えている。そう、この部分こそが漱石が考える「利己心」と「個人主義」の決定的な違いである。どれだけ自由を求めようとしても、その過程で他人に迷惑をかけることや、権力や金力を振りかざすようになってしまうとその得られた自由は義務心を伴わないものとなってしまう。それは漱石の望まなかった、「私」に発現したような「利己心」であり、漱石の個人主義に反するものである。

「私」には自分を律するような義務心はなかった。「私」が「K」に対して行ったことは後のことを考えられていない「無責任」な言動であったように思われる。義務心という

言葉は漱石独自の言葉であると思われるが、その意味は「自分の行動は律する必要があるという心」と解釈できる。「私の個人主義」の中で「義務心の伴っていない自由は本当の自由ではない」という言葉があるが、それを言い換えると「義務心が伴っていなければ、不自由である」と言っているのだと考えることができる。実際「私」は、自分の幸福についてくる黒い影に脅かされ、世の中にたった一人で住んでいるような気持ちの中で、「人間の罪」に囚われてしまう。これは義務心を持たない自由や利益を求めた「私」の利己心が引き起こした不自由ではないだろうか。

漱石がこの「こころ」という小説で伝えたかったこととは「利己心というものは義務心の伴っていないものであり、むやみやたらに発露してしまうのは良くないことだ。個人主義の意味についてもう一度よく考え、義務心を伴った自由を得ることが、社会にとって、もちろん自分にとっても重要なことである。」ということであると私は考える。自分で主体的に、自由を勝ち取っていれば、「私」も「K」も死なずに済んだのではないかと思う。他人を頼ることも時には必要ではあるが、義務と責任を負うと自ら意志することが不自由からの脱却につながるのではないかと考える。

漱石が小説『こころ』を通して私たちに託したメッセージ

夏目漱石の現代日本の考え方

夏目漱石は、現代日本、特に、現代日本の開化に対して批判的な意見を持っている。１９１１年、和歌山県で行われた講演についてまとめられた講演録『現代日本の開化』で漱石は、現代日本の開化のことを「皮相上滑りの開化である」と述べている。日本の開化はいわば、アメリカなどの外国からの圧力が起点となって起こったものである。ゆえに、内発的な西洋の開化とは違い、日本の開化は外発的になってしまった。やむを得ず、そのうえ時間もかけられず粗の多い開化を行ってしまった日本に対し、「我々の開化の一部分、あるいは大部分はいくら己惚れてみても上滑りと評するより致し方がない」、また、「事実やむを得ない、涙をのんで上滑りに滑って行かなければならない。」と漱石は感じている。

その開化の性質に沿うように、日本人は今、外発的、消極的で、回りを気にし、『神経衰弱』になっている。また、漱石もその性質を持つ一人で、漱石はもともと江戸の名主に望まれない末っ子として、幸の薄い少年時代を生きてきたとされている。その上、肺結核や糖尿病など様々な病気を抱えており、神経衰弱やうつ病も患っていたという。そのため、漱石の作品には主人公に病弱な者が多かったり、国家に反抗的な姿勢が表れた作風が表れている。それ故に、このような日本の性質を漱石は自分と重ね、悲観的に、鋭く分析している。

こころについて

夏目漱石が心を通じて伝えたかったことは『明治の終わり』だとされている。漱石は乃木希典の殉死をきっかけに『こころ』を執筆した。乃木希典とは、日露戦争で旅順攻囲戦の指揮を執ったり、また明治天皇の後をしたって殉死したことで有名な元陸軍大将で、また学習院院長として教育にも携わっていた。また、その功績は日本にとどまらず世界にも賞賛され、『明治の精神』であるとも言われていた。漱石は時代の終焉、そして大正という新しい時代を迎えるにあたって、『こころ』の作中で、Kを自殺に追い込んだことに長年苦しめられやがて時期を経て、自殺をした先生と、日露戦争で多数の犠牲を払い、十数年を自らを苦しめながら生き、忠誠をつくした明治天皇の崩御後、殉死した乃木希典に触れ、先生という人物を明治の精神の象徴として作品に残していったのだ。また『私』という一人の人間の妬みなどの個人的の感情を基にして、そこから人間の罪、最後には明治という時代にまで広く焦点を当てた。

また、漱石はこの作品で、『明治時代の不条理さ』も表現しようとしたのだと思われる。小説「こころ」が連載されていた時、娘の結婚は親が決めるのが当たり前であり、そのため『私』は結婚の承諾を取りに、御嬢さんのお母さんの所に行く。そのほか多数の表現で、当

たり前とされている不条理を的確に指摘し、世に訴えかけたのである。

最後に

夏目漱石は、明治の風潮について批判した作品を残しているが、これは明治にはとどまらず、令和である現在にも強く通じる話であると思う。グローバル化が重視されている今、日本は消極的、内向的なためにほかの国よりも少しばかり遅れている傾向がある。現状からいきなり風潮を変えるのは難しい話かもしれない。だが、漱石の作品を通し、日本の昔からの欠点を今一度見つめなおし、少しずつでも日本の性質を変える必要があると私は思う。

漱石が小説『こころ』を通して私たちに託したメッセージ

なぜ「K」は一生を自殺で終えるという選択をしたのだろうか。考えられる理由はいくつかあると思う。断罪の気持ち、先生に裏切られたことによるショック、お嬢さんへの恋が叶わなかったことへショックなどの様々な原因が挙げられる。では、彼の本当の自殺理由は何だったのであろうか。私は、心の拠り所がなかったこと、つまり孤独感が一番の原因だと考える。彼は普段から、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言って、道を貫くことを第一信条としていた。彼は、医者になることを条件に学費を出していてもらっていたにも関わらず、道のためにそれを裏切ってしまったことで、実家からも養家からも絶縁されてしまったという過去がある。つまり、道を貫くために、身内を裏切ったのだ。そんな彼が、友人に裏切られたことを理由に自殺するだろうか。私はそうは思わない。自分も同様に他人を裏切った過去があるからだ。また、彼が言っていた「覚悟」とは、お嬢さんのへの恋をあきらめる覚悟でも、道を捨てて恋に突き進む覚悟でもなかったのではないかと考える。彼は自殺をする覚悟をしていたに違いない。お嬢さんに対して恋をしてしまった時点で、彼の第一信条に反している。彼は自分の道を進めなかったことへの罪悪感に飲み込まれていたのだと思う。しかし、これが直接の自殺原因ではないと思う。このような状況下で、彼には自分の苦痛を打ち明けられるような相手がいなかったのだ。先ほど述べたように、彼は養家事件や友人の裏切りを経験している。この時の「K」が頼れるような存在がいただろうか。もし私が同じ状況に陥ったとしたら、私でも一人で抱え込んでしまうだろう。さらに先生は、「K」から恋心を打ち明けられた時、彼が恋を諦めるように精神的に追い込んでいた。しかしこれが「K」にとっては「死」に追い込まれるほどの重圧となっていたのではないだろうか。どこにも行き場がなくなってしまった彼が孤独感をなくすためには自殺という選択肢しかなかったのではないかと考える。これが、私の考える「K」の自殺の原因だ。

次に作者である漱石は『こころ』を通して何を伝えたかったのだろうか。私は、自己選択の大切さだと思う。「現代日本の開花」の中で、漱石は「西欧の開花（すなわち一般の開花）は内発的であって、日本の現代の開花は外発的である」と述べている。ここでの内発的とは、「ちょうど花が開くようにおのずからつぼみが破れて花弁が外に向かう」ことを指し、外発的とは、「外からおっかぶさった他の力でやむを得ず一種の形式をとる」ことを指している。現代を生きている私たちは、自分たちの意思ではなく他からの影響に左右されているということを指摘しているのだと思う。確かに、学校生活などを振り返ってみても、これがよくわかる気がする。この人がこうするから私もこうしようなどと考えてしまうことが多々ある。また、SNS などを通して、簡単にさまざまな人の意見を得ることができる。自分の意見を持つ前に、他人の意見を得て行動選択をする傾向があるのではないだろうか。もっと広い視野で見てみると外交問題などが当てはまるだろう。日本の政治は外国の政策などに左右されている気がしてならない。諸国間でいい関係を築き上げるのは大切なことだ。しかし、日本の本来やるべき政策を為すことができないまま、外国に流されているのは違うと思う。「長いものには巻かれろ」ということわざあるが、すべてにおいてそれにしたがって行動し

ていれば、自分の意思はどこに行くのだろうか。「強いものと交際すればどうしても己を捨てて先方の習慣に従わなければいけなくなる」という中での選択は「外発的である」といえるだろう。「みな特別の名のつく時代でその時代時代の意識」があると漱石は言う。つまり、今この瞬間は今しかなく、次の時代に進めば、その時代のことに意識が持っていかれて今のことなど忘れてしまうということだ。本当にそうだとすれば、「K」のように今の自分がやりたいこと、やらなければいけないこと、貫きたいことを考えて、行動を選択するべきだ。そうして、自分のなかの咲かせるべき花を自分の意志で咲かせてほしいという漱石の願いが込められているのではないだろうか。